



大橋先生の講座でスタート!

新年度4月は大橋先生の講座を開催、昨年8月の講座以来8カ月振りの楽しいスタートとなった。

今回はマルイシレストランをお借りし、午前中に前年度の締め括りとなる総会で一年の活動を振り返った。正午から大橋先生との昼食会と楽しい歓談で過ごした後、生涯学習センター会議室へ移動し「スイス・アリアナ美術館所蔵の『力』銘の有田色絵磁器」の講義を受けた。今回は『力』の銘が何を意味するのか、興味津々でワクワクしながら受講した。

スイス・アリアナ美術館に所蔵されている江戸時代の有田磁器に、世紀にかけてのものがあり、その中に「力」の染付銘の色絵磁器が1点存在している。



有田史談会

事務局

佐賀県西松浦郡有田町上幸平 1-8-5

TEL 090-4740-4752

HP arita-sidankai.sub.jp/

✉ arita-sidankai@hotmail.com

また、有田で大明嘉靖年製銘が多くなるのは、世紀後半で、柿右衛門窯跡出土品での銘や見込みの文様についての表現例が紹介された。

これまで「力」銘の有田磁器を見たことがなく、この「力」が何を意味し誰のこのなのか興味津々で、事前の資料で大部分の内容が解っていたとはいえ、大橋先生の講義に釘付けになった。

有田の磁器が、中国景德鎮窯の影響を受けながら造られてきたことは十分に想像できるが、今回の大明嘉靖年製銘が猿川窯や長吉谷窯、南川原の柿右衛門窯などで実際に出土している大いに学習に良い機会となった。

また、有田磁器の創始者と知られる朝鮮人陶工の金ヶ江三兵衛の5代



の墓石が柿右衛門家の墓地にあり、5代三兵衛から領主多久茂孝へあてた請願書に「陶器の不景気等にて(略)職方相止(略)絵職等にて」(肥前陶磁史考)とあることから、5代三兵衛が南川原で絵描き職人として生計を立てていたことが推測され、「力」が金ヶ江の頭文字をカタカナ表記したと推測されるとの話があり興味つきない講義となった。

尾崎顧問の有田人物伝講義!

金ヶ江三兵衛とその周辺の人々

尾崎葉子顧問による講座は、以前の会の要望でようやく実現した。長年の歴史民俗資料館館長の職から離れられ、現在はお住まいである武雄市楠町で民生委員も務めておられる多忙な中での講義となった。

金ヶ江家について、三兵衛さんの墓碑について、金ヶ江家の系譜について講義いただいた。

今回はその第一回目だったが、第二回目的の「有田人物伝講義」を楽しみに待ちたい。



生涯学習センター会議室にて

有田と古九谷のアイコンは「ハートつなぎもん」

鶴 美百合

史談会の皆様、ハロー🐣 私は皆様とご一緒にレクチャーやフィールド・トリップで史跡探訪できることを何よりの楽しみとしています。

さて、今回も、パソコン不良の為、スマホで文字打ちとなりましたので、今度こそ、手短かに参りたいと思います。



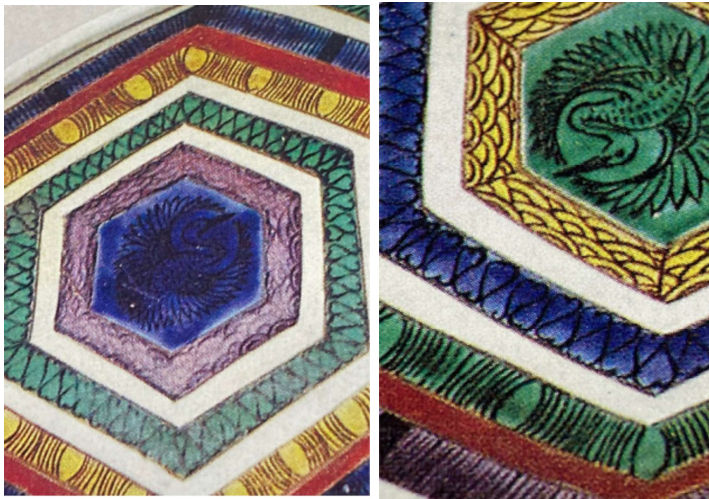
私は、有田だけに存在すると確信していた「ハートつなぎ」ですが、実は、先日、武雄市図書館で借りて来た古九谷の本「日本の陶磁Ⅱ、古九谷」(1989年発行、監修：谷川徹三 川端康成。この本をペラペラとめくっていつて、「色絵亀甲鶉文大皿」高径：8.5 cm、口径：43.0 cm、



高台径10.7 cm)に出会いました。

一見「ハートつなぎ文」になんの関係もなさそうな、九谷独特の亀甲文でスルーつと通りすぎそうですが、目を凝らすと、まるで隠れキリシタンかのように青色の釉薬を塗り被せられ、ひっそりと人目をしのぶかのように「ハートつなぎ文」の文様帯が五重の亀甲の形から現れたのです。❤️❤️ 皆様「ハートつなぎ」が見えませんでしたでしょうか？

一方、緑の釉薬の文様帯は拡大するとおはつきりと見えますね。



今回、私のハートは喜んでいきます。「古九谷の本」に巡りあい、会報で「古九谷ハートつなぎ」を紹介できる事ができるのですから。💜 それで、私の「ハートつなぎ」の定義ですが、ザビエルの燃えるようなハート❤️と思っています。

今まで、日本では、「ハートつなぎ」に注目した人も文献もなく、誰もハート(心臓)と捉える人はいないようです。ハートの形はしているがハート(心臓)ではないと。あえて言えば、ハートの形をした「猪目」魔除けというのが大方の意見だと思われる。誰もハートとは認めてもらえない現在ですが、この大皿「色絵亀甲鶉文大皿」(大平鉢)の特徴を観察し推理するのは思いのほか大変楽しいものでした。

例えば、古九谷の地紋のオン・パレードはハンパではない事。手が込みすぎでしょ！と言いたい。この文様帯を描くには膨大な時間と余裕がないとここまで精緻に描いて、独特なデザインした意匠の作品は描けませんね。


また、「ハートつなぎ」は根気強さと計算力が必須です。ハートを上下にムラなく巡らすには、割り算の計算が必要です。いきなりハートを

描いて行っても、最後の方は必ず歪な形になります。几帳面な絵描さんが必要。

ハートつなぎの見本となるのは、初期の鍋島藩窯の「ハートつなぎ」です。パーフェクト均等でお見事！



その他は、途中で面倒くさくなったハートがだんだん崩れていくパターンですね。次の「花蝶文皿」の「ハートつなぎ」は赤色でわかりやすいですね。緑の「三丸文皿」は「ハートつなぎ」が隠れています。

それは、兄から借りた本に「隠された十字架、江戸の数学者たち」「関孝和はキリシタン宣教師に育てられた」副島隆彦監修、六城雅敦著と表紙に書かれていましたが、加賀藩にもいた？ この本では、築城上手の加藤清正・忠広もキリシタンであった事が大きいと、えー？あれー？ キリシタン嫌いだったのでは？と思います、まあ、数学とキリシタ

それはそうと、なぜ亀甲デザインなのか？まあ、めでたいもん(文)！でもいいかもしれませんが、幾何学模様、いざ描くとなると難しそうです。数学の技が必要。なぜなら、この亀甲の線の正確さ、まるでグラフィックデザイナーが描いたようではありませんか？洗練されて優美すぎます。



ン宣教師が隠されていた事が分かる興味深い本でした。

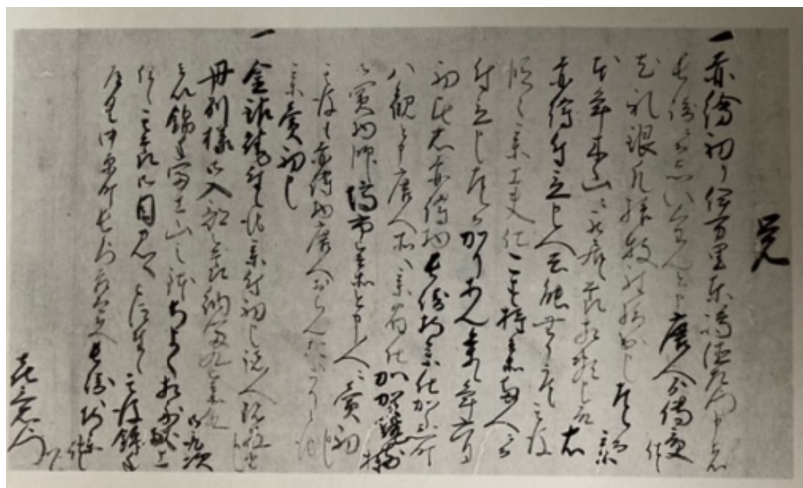
そういえば、鍋島藩窯にも幾何学模様の極みと思えるのが多々ありますね。

また、柿右衛門様式にも、一例ですが、黒で七宝模様を線描きし、その上に絵の具を厚く盛り上げて塗りつぶしているように思われる壺がありました。




しかし、なぜ、古九谷の皿(大平鉢)に「ハート」つなぎが見つかったのでしょうか？ 実は、柿右衛門様式と九谷様式の歴史的関わりが既にあったと伺い知れる柿右衛門家の「覚(おぼえ)」の記述がある事は周知の通りと思われます。
「かりあん船」(ポルトガル船)が来

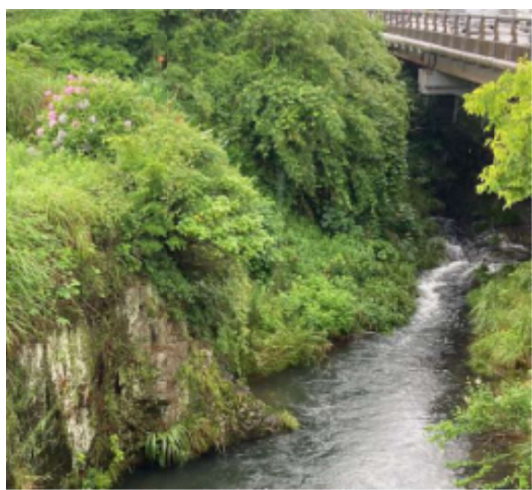
た年、正保三十四年(1651)の六月初めの頃、加賀筑前様のお買物師である塙市郎兵衛という人に売り始めたと柿右衛門さんの先祖が書き残しておられます。
既に一六四六年辺りには、加賀藩のお買物師が、長崎の港に来て有田の柿右衛門さんの焼き物を購入してウロウロしていたという事がわかります。私の拙い推理ではありますが、加賀藩特注ではなかったかと思われ



その後、キリシタン・ネットワークと言いますか、「ハートつなぎ」交流を重ね、古九谷特有のオリジナリテイー溢れる大胆で豪快そして優美なデザインが加賀の「藩窯誕生」かのようにつながったのではなかったかと今回、勝手に推察いたしました。

さて、有田のキリシタンにまつわる文書では、柿右衛門さんの師、先生として出てくる高原五郎七に興味がないのですが、特に、寛永十年(1633)にキリシタンの詮議を受けてやむなく有田から姿をくらましたキリシタン陶工の高原五郎七、次回の会報にご期待ください 

(岩谷川内の川 キリシタン陶工高原五郎七が窯道具を捨てたという川か？)





さて、「古九谷」とはなんぞや？と問われれば、にわか勉強で恐縮ですが、もう、今では、古九谷加賀藩はキリシタン大名抜きでは考えられないと思う程、石川県の大ファンになりました 🍷

加賀藩三代藩主前田利常(1594-1658)と大聖寺藩初代藩主前田利治(1629-1660)のキリシタンに寛容な親子はキリシタン大名客将ファミリーらを近辺の屋敷に住まわせました。

なんと、驚くばかりなのは、十六年間におよび手厚く保護し、一六四四年、徳川幕府によりマニラ国外追放になるまで、金沢でキリシタン生活を穏やかに過ごさせたのであります。今では、この地は金沢のキリシタン観光名所として巡ることが出来ます。

さて、この武將たちが金沢の地にくるきっかけは、天正十五年(1587)豊臣秀吉がバテレン追放令を出した日からでした。キリシタン大名で有名な高山右近とは、社会の教科書に出てくる、「フランシスコ・ザビエル像」が発見された大坂の高槻領主でした。

キリシタンの高山右近に、豊臣秀吉は「キリシタンを捨てなければ領地没収するゾ！だから、早くキリシタンを捨てミヤー！さあさあ！とおし迫ってきたのです。が、しかし、あの、豊臣秀吉に「No」と言い放ち、キリシタン信仰をとったのであります。パチパチ！ 🍷

しかし、領地を没収され、追放され、あれっ？こんなはずでは、と無一文になった高山右近でしたが、。天正十六年(1588)利家は客将として高山右近を迎え入れます。



その後、義の高山右近の信仰の友、丹波国守護代、知(インテリ)の内藤如安(ジョアン)様、(実は、ご子孫の内藤大(だい)氏、オペラ歌手は数年前に有田来訪されています)も金沢に受け入れられるのであります。

そこで、茶湯が盛んな金沢にはビッグな登場人物、千利休がバックアップします。

高山右近が金沢に迎え入れられる時に千利休は、豊臣秀吉を狂歌でおちよくった後、「高山右近が金沢へ向かった、幸せめでたい」というメッセージを手紙で送っていたそうです。

また、この二組のキリシタン家族が過ごしたと思われる住居は、現在の石川県立美術館辺りなんだそうです。兼六園もすぐそこで、いい環境ですね。

驚くべきは、ここ金沢の地で、慶

長十三年(1608)、日本初での盛大なクリスマス・パーティーが開かれたそうです。また、ターキーの代わりに鴨でお祝いしたとも言われ、現在でも、伝統料理として「鴨の治部煮」として残っているとか。

そういえば、北陸にあつて、金沢のお醤油も甘口なんだそうです。九州有田も甘いですよ？ 甘口醤油つなぎでしょう 🍷

また、茶会も開かれるのはもちろん、近くの南蛮寺(教会)では、聖歌が「グロウオウーオウーオウー」グロウーオウーオウー、インエクセルシスーデーエーオー」と歌われ、ミサがとり行われ、洗礼時には九谷焼の「洗礼盤」を使っていたのでは？と推測いたします。このように、イエズス会報にも「金沢は日本において最も栄えた教会」と書かれてあるそうです。

まだまだ「ハートつなぎ」、驚き満載の金沢前田藩ですが、キリシタン大名の話ばかりになってしまっただようでかたじけないです 🍷

それでは、「ハートつなぎ文」よ、願わくば、有田と九谷を「ハートつなぎ文」がアイコンとなり、これからも、未永く繋いでいきますように！

有田皿山の川原古酒場

鶴 一樹

有田皿山一七世紀半ば頃、小説「龍悲秘御天歌」村田喜代子著に「地酒が充分まわり焼酎が出る頃になると、座が陽気になり歌のひとつも出始めた」と描かれている。百婆仙一族の一場面。小説ではあるが酒を楽しんで、自由に存分に飲んでいく様子がわかる。

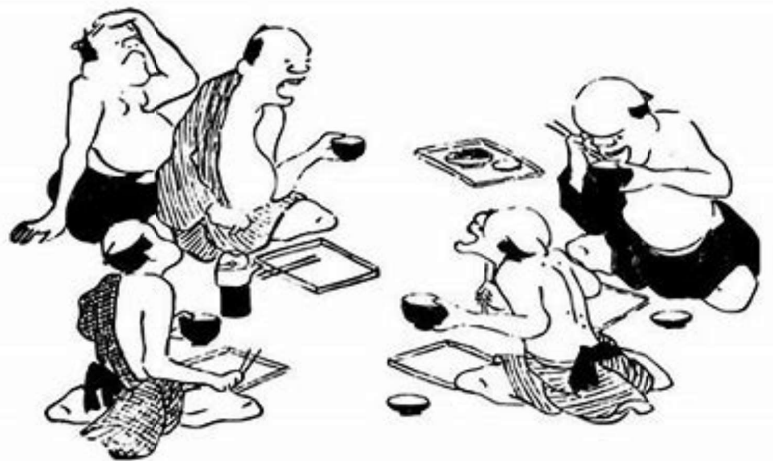
ところが、酒事情が一変する。一六五七年（明暦七）鍋島藩は「酒請制」を設け、高い高い運上銀を収める者にだけ酒株を許し、有田皿山は「山中にて米もとれず」と酒飲みまず働けとのたまわった。酒を飲むには脇酒といって皿山以外から買ってきて飲むしかない。不便なことだ。



だんだん密造したり水で薄めた酒やら高く売る転売屋などヤクザ者が増え、博奕する者など犯罪多く無法地帯になった。人の出入りが多くなると、有田焼の秘法がもれるおそれがある。九〇年間の酒ひでりから解放され「酒請け」が許可された。

一七四六年武雄の百武善次郎酒請が酒屋を始めた。運上銀納められず取り消された。次に六角（白石）黒木藤兵衛に交替。運上銀、銀十一貫匁（一七六匁）酒一升百二十八文、一合十三文でスタート、月十五匁ほど税に持っていかれる。儲け出ず困って納税無理だと陳情。一七五六年、半分の六貫匁にまで下りてきている。酒屋営むには税のほか皿山への寄付とか何かにつけ金を出し、役人様にも袖の下、ヤクザ者にはみかじめ料などの出費は、これら必要経費で税を納めたら、銭残るどころか借金だ。やって居られないと閉店した。

そして真打ち登場。北方芦原の人で、ずっと酒造りを営んできた渡辺利右衛門。皿山で酒請になった。代官日記では宝暦十三年（一七六三）（明和四年（一七六七）二代目源右エ衛門は、天明五年（一七八四）（文化七年（一八一〇）。一七六五年、相棒の川原家は皿山に移住している。



芦原から皿山代官日記に寛政七年（一七九五）大樽山酒場善助として記録されている。法恩寺の位牌には八代としてある。大樽の川原家墓地には六代から九代までの墓がある。八代は中興の祖。文化七年（一八一〇）二代目源右エ衛門が死んでいるので川原古酒場酒請となった。渡辺家から川原家へ移った。

「文化七年申渡帳」には、多数の事件の記録がある。その中に酒場で的事件を記録してあるところを一、

二紹介すると、本幸平の増五郎という男、二月十四日夜酒請源右エ衛門（二代目）の店にきて酒量りの者に言いがかりをつけ大声で怒鳴り散らした。手代たちへも罵詈雑言、咥や役人が来てもますます大声を出し騒いだ。

判決！「以前にもたびたび無法な振る舞いに及び不届き至極によつて戸閉めの刑を受けた」（増五郎はチンピラではない大物のようだ）

その後、一八一三年（文化一四）の申渡帳に本幸平山増五郎、去年八月吉蔵とか：あちこちで因縁をつけ、役人が来ても文句を言い、その後赤絵屋彦七宅へ行き大声を出し家に病人がいるのに怒鳴りまくり、手がつけられない程騒いだ。

判決！ 以前「戸閉め」の罰を受けおとなしくすべきを、また懲りず無法なことを繰り返す不届き至極。よつて居所払いの罰に処す。（居所払いとは隣に移ればよいぐらいの軽い刑か？）

酒がまわれれば人は暴れたり喧嘩をしたり、日頃の鬱憤をはらす。うまく酒場を繁盛させ、明治四年の酒請制廃止まで営業し大富豪になった。

ところで川原古酒場は大樽のどこにあったのだろうか？

京都弾丸日帰り旅！

西本願寺を目指して！

井手 邦男

今年の五月下旬、コロナ禍明けて久方ぶりに九州を脱出し、無謀ながらも日帰りで京都まで出かけました。娘の提案で、我が家の宗派である浄土真宗の本山（京都の西本願寺）で、法名をいただきに娘と娘の友人と三人連れ立って行ってきました。

私の両親も健在中に、お寺の団体旅行で西本願寺まで行き、法名を受けていた事もあり、私たちもいつか必要になるお浄土での名前を付けてもらうつもりで今回の旅を計画していました。

武雄温泉駅から早朝の特急列車で博多まで向かい、博多から新幹線のぞみに乗り、京都には十一時には着



西本願寺 唐門（国宝）

きました。京都は修学旅行の学生や海外からの観光客が目立って多く、移動手段のタクシーが拾えないと事前の情報で把握していたので、歩きも覚悟でいきました。幸運にも京都駅前でもタクシーを拾えたので、目的の場所西本願寺への移動は疲れを増す事なく行けました。

初めて目にした西本願寺のスケールの大きさに圧倒されました。参拝や拝観は宗派を問わず毎日無料で、一日四回（所要時間は一時間）お寺のお坊さん自ら境内を案内するツアー「お西さんを知ろう！」があつたので、西本願寺に到着すると同時に参加しました。

広大な敷地内には国宝や重要文化財に指定された貴重な存在となっている建物がいくつもあり、その中の阿弥陀堂と御影堂、唐門などを見る事が出来ました。国宝の建物全体は壮大で感動しますが、建物内の廊下は時代と共に劣化があるためか、歩くとびに軋む音がする、まさに驚が鳴いているかのような驚張りのような廊下になっていました。

また廊下のあちらこちらに隙間がある部分をさまざまな形の「埋め木」といった手法で味のある修復を重ねて今に至っていることを知りいろいろ

ろな埋め木の形を探し楽しめる部分もありました。若いお坊さんで、軽快な話しぶりで、建物やお寺の歴史をコンパクトにまとめた概要を知ることができました。

今回の本懐である帰敬式（おかみそり）法名を授かる式は毎日午前と午後の二回行われていて、午後の部に開始される帰敬式に参加するため、指定された会場で受付を行い、案内された場所で待機していました。簡単に法名をいただけるのかと思っていました。事前に儀式のリハーサルが行われ厳粛な儀式があるのだと知り、恐縮してしまいました。

参加者は二十二名で、お導師様が参加者一人一人の髪に剃刀を当て（剃髪することを意味する）、「おかみそり」をする儀式がありました。私ら親子は予め自分が望む漢字二文字を法名に付けてもらうために、内願といった形で檀家のお寺を通して二か月前に申し込みをしていました。

法名には相応しい漢字であることが原則あるようで、査定期間も含め最低でも二か月前の申し出と決まりがありました。内願でない場合は西本願寺から名前を付けてもらうため、漢字二文字に対する意味や解釈が書

た。

法名は浄土へ行った際の名前とばかり思っていたのですが、西本願寺のお坊さんから『法名は決して死後の名前を受けると言う事ではありません、自分の生き方を問い直し仏法をよりどころとした生き方へと転換する、決意を表す名をいただく事です』と話があり、考え方が一変しました。私の両親、妹夫婦など法名を既にもらっていた意味が今は正しく理解ができました。日常の時間に流されてしまう現代ですが、日本人の心の拠り所となってきた仏教を今一度再認識した旅になりました。



西本願寺 御影堂（国宝）

3つの死について

坂井 勝也

はじめに母の死について。

最後は、山内町の大野病院で息を引き取りました。亡くなる三日前から目を瞑ったまま、うわ言を言っておりました。「もう疲れました」まさ（おかあさん）と姉の名前を呼んで「早く迎えにきてくれ」と、この繰り返しでした。夫の名前はありませんでした。最後の日は、目は瞑っていましたが、声がハッキリしてい



ましたので家に帰ったところ、二時間後に亡くなりましたと病院から電話がありました。享年九十八歳。死に顔は穏やかな顔をしておりました。母と姉が迎えに来て、一緒に天国に行ったのだらうと思います。

「マッチ売りの少女」の中に同じ情景がありました。少女はもう一度、マッチを壁にこすりました。その光の中におばあさんがとても優しく幸せそうに立っていました。「おばあさん！」と叫びました。「ああ、私も一緒に連れて行って！」少女は素早く、束になっていたマッチの残りを全部擦りました。マッチはたいそう明るく輝き、昼間のようにになりました。おばあさんは小さい少女を腕に抱えて嬉しそうに輝きながら高く飛びました。空の上には、寒さもひもじさも心配ありませんでした。二人は神様のそばにいたのでした。母は青春時代を過ごした台湾の空で、母と姉の三人で仲良く過ごしているのではと想像します。

次は朔（さく）の話。

朔は我が家で二代目の猫である。我が家の守り猫である。我が家に不法侵入者があれば、どこにいても馳せ参じ、フウーといって威嚇し追いかけています。人間の世界では実力行使

は禁じられていますが、猫の世界では実力行使は年中で頭は傷だらけ、不思議なのは自分の家の車が帰ってくると、どこにいても馳せ参じ迎えてくれることです。晩年は末期のガンに罹り、三年前の早朝妻の腕の中で息絶えました。身近にいる親族で、武雄の古いお寺で読経のあとに火葬してもらいました。今でも我が家の一員として家を守っています。

最後にコオロギの死。

座敷に腹を出して片脚をピクピク動かしている昆虫はコオロギでした。誰も見送る者もなく、寂しい孤独死です。最近、鈴虫やコオロギの鳴く声が聞こえなくなりました。人間や天候異変のせいだと思われまう。コオロギと鈴虫のオーケストラが懐かしく感じます。

肥前のやきものの魅力④

山口 信行

初期色絵（古九谷）の魅力

全くの素人目線で古伊万里の魅力。をこれまで探ってきたが、魅力2で述べた寛文期の染付有田焼を古美術界（骨董界）では「藍九谷」と呼んだりしているが、その色絵が有田焼

の初期色絵であり、別名、「古九谷」と呼ばれて来たものである。

大正時代までは、江戸時代に作られた柿右衛門や、鍋島、そして、きらびやかな色絵の古伊万里等是有田産。それ以外は、どうやら石川産であり、古九谷を含め、九谷焼として捉えられていた感があるようだ。

ところが、戦後の昭和三十年代に入り、従来云われていたその古九谷（染付の藍九谷を含む）は、有田産ではないかとの疑義がもたれ、その後の有田古窯の山辺田窯跡や山辺田遺跡等の発掘及びそれによる大量の色絵陶片の発掘等により、現在では、学術的には江戸初期の有田産であることが結論付けられている。既にご周知のとおりである。





ところで、その初期色絵（古九谷）の魅力であるが、同じ時期である寛文期の染付（藍九谷）の魅力の項でも述べたが、実にデザインの多彩さにあるうかと思われる。初期色絵に近い古九谷は、初期伊万里の特徴である口径の三分の一の高台等を残したのもあるが、より薄つくりで、洒落なデザインをもつものもある。

径二十cm位の中皿もそうであるが、十五cm位の小皿や向付等もまた、本当に多種多様なデザイン、形状があり、魅力を放っている。のちの精巧な柿右衛門や鍋島に至る以前の、プリミティブで自由なデザイン、色彩

が特徴のように思える。

さらに青手と呼ばれている三十cmや四十cmを超す大皿ともなると、青や緑や黄色などの濃色で器面を塗りつぶしたものなどは、油絵の絵画を見るような迫力すら感じられ魅力を放っている。安土桃山期の絵のタッチが、有田の職人の描画感覚とリンクしたものがあつたんじゃないかとも思われる迫力で迫ってくる。

また、同じ大皿の五彩手なども、色絵の技術を獲得したばかりの当時の陶工たちの熱い思いが、素晴らしき明るい色彩感覚と共に噴き出しているようにすら思える。

その後にはやって来る海外への大量輸出時代のなかでは、柿右衛門や金蘭豪華な古伊万里が主流になるなかで、初期色絵である古九谷は作られなくなる。時代の流れに敏感に対応してきた証左に他ならないが、個人的にはある意味、残念な思いがないではない。有田の中で、初期色絵のあの古九谷スタイルを律儀に守って、現在も作陶している窯焼人が江戸、明治を通して現在まで存在してくれただら、そういう窯元が現在も残っていたら、云々ゆる“古九谷論争”なるものは存在しなかっただろうに思うのであるが、まあ、当時の封建下では不可能なのは自明なこと



色絵菊鳥文大皿

はある。

“古九谷論争”について一言加えれば、有田の山辺田遺跡の発掘で有田産であることはさきに述べたように学術的に確定しているが、未だに石川産にこだわる方も美術家等の中にはいらつしやるという。

その点は、やはり九州陶磁文化館の名誉顧問である大橋康二氏がおっしゃっているように、本当の九谷の伝世品を見つけて「これが本当の九谷です」と紹介する必要がある、というのは真理だと思う。残念ながら、未だそういうものは示されていないようだ。

さらには、初期伊万里の呉須で描いていた有田の陶工が、初めて色絵の技法を身につけた。嬉しくて、その絵具を思い存分使って器面に大胆な色を載せていった、それが初期色

絵（古九谷）。後世それが洗練され、柿右衛門の美しい余白の美や、見事な鍋島の繊細な美へとつながっていった。

有田町歴史民俗資料館の村上伸之氏は、こう述べられている。「有田に古九谷がなければ、そこから派生する柿右衛門も鍋島も古伊万里も生まれることはなかっただろう」と。これもまた真理なのであろう。色絵の技法をもったばかりの陶工が、最初から柿右衛門や鍋島を作ることは絶対不可能なのだ。それらとの間に、初期色絵（古九谷）があつた。有田の陶工たちが初めて色を獲得した喜びを思う存分表現した作品、それが「古九谷」だったのじゃないか。残念ながら、そのスタイルは有田には残らなかった。常に有田は時代々に即応して変化していったからであらう。



色絵花卉文台皿

善福院考（外尾町）

前田 順三

江戸時代古地図で安政六年（1859）以前の古地図として、慶長肥前国絵図、正保絵図、伊能図、天保国絵図等があるが、それらのどの地図にも、旧新村（後の有田村→東有田町）地区の中に唯一「外尾村」の地名だけは記載がある。

このことから、外尾村は江戸期には新村（後の有田村、東有田町）の中心であり、そこに創建された神社が「椎谷神社」であり、その地の村社として崇められたと考える。そしてその新村に椎谷神社とともに寺院



善福院山門

として「善福院」があったと考える。有田町歴史民俗資料館二〇一一年九月発行の「一五〇年前の有田皿山歩こう隊覚書 其ノ式」（以下「歩こう隊覚書」）に掲載してある外尾町地区にある神社・寺院の「善福院」の項の説明に、

善福院

浄土宗醫王山善福院瑠璃光寺

住吉村西福寺が武雄邑主の命により上西山（下西山の誤り）に移転、第3世住職頂誉上人は住職を弟子に譲り、有田村薬師堂を幕府の許可を得て浄土宗に改宗、藤津郡吉田村善福院の院号を被下された。

文政の大火後、外尾村（外尾町）に移転。現在二十三世（2012年現在）。善福院は六ヶ所に末庵があったと過去帳に記載されている。由緒の詳細は大火の為、古文書等が焼失したので不明である。寺格は准別格寺院。（参考：「蓮門精舎舊詞」より）となっている。

参考文献として挙げてある「蓮門精舎舊詞」というのは、元禄・享保年間（1688～1736）に浄土宗寺院の沿革を全国規模で調査収録したものである。それを見ると善福院の説明文章は他の肥前国内の寺院の中でも比較的多くの文字数を割いている。

そのことから当時の松浦郡内の浄土宗寺院としては割合大きい規模の寺院であったことが窺い知れる。

それによると武雄・西福寺を隠居した頂誉上人は初めから「外尾村に薬師堂を建て」となっていて、先に挙げた「歩こう隊覚書」の「外尾村に移転」とは相違している。安政六年（1859）の絵地図を見ても旧新村地区では唯一の寺院である。江戸時代外尾村は新村の中心地区であったであろうから、江戸時代初期に制定された「寺請制度」で現在の役場と同様の戸籍作成、住民管理を寺院が行っており、外尾村に寺院の存在は不可欠であったと思われる。

「歩こう隊覚書」に文政の大火後に（上有田地区から）外尾村に移転したと書いてあることについては、確かに善福院の現在のご住職のご両親（老僧ご夫妻）からも何度かお聞きしたことがある。現在の稗古場の報恩寺近くにあった、あるいは上幸平の三空庵広場の所にあったであろう庵寺も前身の一つであると伝え聞いている。確かにそういう地区にあった庵寺も一緒になったと思われる。しかし決して善福院そのものが、文政の大火により旧上有田地区にあったものが旧下有田地区に移ったのではなく、母体は元から外尾村に在っ



善福院本堂

たというのが私見であった。

佐賀市の佐賀県公文書館に行き、写しを取らせてもらったが、「明治八年調 浄土宗寺院明細簿」によると「新村 善福院」とあり、他地区より移転したことを思わせる記述は一切ない。開基は明暦元年（1655）年とある。

「蓮門精舎舊詞」には頂誉上人が「承応二年（1653）杵島郡武雄西福寺ヲ隠居シ外尾村ニ薬師堂ヲ建テル」（意訳）となっているが、有田町歴史民俗資料館所蔵の「昭和十七年以降 社寺ニ關スル例規綴 有田村役場」には「慶安二年（1649）ノ創立」

となっている。
いずれにしても善福院は、慶安三年(1650)創建と推定される椎谷神社と並んで江戸時代から新村の信仰・行事等生活の中心であり、村民の心の拠り所であったと思われる。

そのように思っていたところに、有田町史「政治・社会編Ⅰ」を読んでいたら、「皿山代官旧記覚書」の文化四年卯年(1807)の項に、「外尾村善福院」という記述があることが分かった。有田町東図書館で「皿山代官旧記覚書」の写しをとってきたところ、「皿山代官旧記覚書」の「文化四卯申渡帳」に、「去月朔日岩谷川内山源次郎其外四人之者共為願成就、子共召連外尾村善福院へ罷出云々」とある。

文中にある「願成就」というのは、春秋の彼岸に行われるもので、春に願掛けをし、秋に願が成就したことを報恩感謝するためお寺や神社において神仏と一緒に飲食物をすること、岩谷川内の住人が願成就のため外尾村の善福院に参籠したことが書いてある。文政四年(1807)、つまり文政の大火(1828)の二十一年前に外尾村すなわち現在の外尾町に善福院はあったのである。大火で移転したのではなかったのである。そして、同有田町史には、善福院

は岩谷川内、稗古場、中島(現在上幸平にある字名)、上南川原山の四か所に末庵を持っていたとある。

この末庵については、佐賀県立図書館所蔵の鍋島家文庫「寺社差上帳浄土宗由緒」にも、

同院(善福院) 末庵

一、岩屋川内山 隠居庵

一、稗古場山 廣福軒※

一、中嶋(島) 阿弥陀堂

一、上南川原山 福泉庵

とある。これは、現在の老僧夫妻が言われる稗古場、上幸平に昔はあった、との口述とも一致する。

(※廣福軒の軒は軒の誤りか?)

現在、善福院境内に設置してある陶板に、

「(前略) もと有田内山にありしが、今外山の山麓に居す (後略)」とあるが、伝聞の誤りであると考え

る。
また、「有田町史 索引・年表編」の年表に、寛永十六年(1639) 有田外尾町善福院開基とあり、開基の年代はどの文書よりも最古となるが典拠は不明である。

しかし、開基の場所は外尾村であるとしても、年代が
・有田町史「索引・年表編」

寛永十六年(1639)

・社寺二関スル例規綴(昭和十七年以降) 慶安二年(1649) 有田村役場

・蓮門精舎舊詞 五十冊

(元禄・享保年間) (1688~1736)

薬師堂建立 承応二年(1653)

・浄土宗寺院明細書(明治八年)

第1課(佐賀縣) (佐賀県公文書館)

明暦元乙年(1655)

と文書により全く異なるのは気になる

ところではある。

赤戯幸コレクション鑑賞

中村 貞光

九州陶磁文化館で公開された個人からの寄贈展「赤戯幸コレクション」に有田史談会で申し込み、学芸員二名による解説を聞きながら鑑賞する幸運に恵まれた。

今回の寄贈品は、おおらかで自由闊達な筆致で描かれた初期伊万里、大胆な文様と色彩のコントラストの初期の色絵、将軍家への献上磁器としての鍋島様式が完成する前に試みられた初期鍋島の四十七点で、全作品を鑑賞できるのは今回が最初で最

後とのことで、何度も会場に訪れた会員があつた。

有田で創られた初期の作品にはおらかな筆の筆致の作品が多く、これまでも柴田夫妻コレクションで毎年入れ替えがあるつどに見てきたが、今回初めて見る作品の中にもおおらかで自由で大胆な筆致の作品がいくつもあり楽しむことができた。

特に初期の色絵の作品には大胆で色彩豊かに描かれた大皿が目についた。初期の色絵は十年ほど前までは古九谷とも呼ばれてきたが、近年では黒牟田の山辺田窯の発掘調査で幾つもの色絵が出土しており、古九谷論争に終止符が打たれることになったのは記憶に新しい。今では古九谷様式など呼称もあるが、今回の寄贈展では初期色絵として呼称が統一され、古九谷の名に替わりこれか



染付山水文大皿 1630~1640年代



染付椿文皿 1630~1640年代

展示室正面の中央には、おおらかに描かれた初期伊万里の大皿と色彩豊かなコントラストで描かれた初期色絵の大皿が並び、一見対照的なながらも作品の魅力に引き込まれた。特に初期色絵の大皿に施された黄色の鮮やかさに緑色が際立ち、これまで見た初期色絵と比べ印象的だった。

展示の解説は初期伊万里から始まった。染付の可愛い鷺や兎の吹き墨の作品が並び、素朴ながらも楽しめる作品だ。染付椿文皿は見込みの中心に椿が描かれ、回りには掻き落と

らは定着していくことになると思われる。また初期伊万里の中にも藍九谷の名が使われてきたが、この名も消えていくのだろうか？ 興味は尽きない。



色絵牡丹文大皿 1630~1640年代

しで白抜き線で花唐草を描き、その口縁には櫛歯文が雑ではあるがしっかりと描かれている。年代は一六三〇〜一六四〇年代。この時代の製品でありながら今の時代にも違和感なく感じるのは私だけだろうか？

錆釉の小皿が二枚。錆釉を掻き落とした作品で、うち一枚は二羽の鷺が描いてあり、素地を活かした作品になっている。

初期色絵の中では何と言っても大皿が目玉だった。色絵牡丹文大皿は黄色、緑、紫の三色を皿全体に塗り埋めた大胆な色使いの青手と呼ばれるもので、紫の花と緑の葉が一面に大きく描かれ迫力満点の作品に目を奪われた。裏面は雲気文を青海波状に描いてあり美しい。

色絵花卉文台皿は唐花・葉の主文様と菊花状の地文を黒で描いてあり、唐花は青、葉は黄色、地文緑で塗り埋めて、やや灰色を帯びた素地の裏面には三方に折枝菊文が描かれている作品。大胆な構図が素晴らしい。

中でも一段と目を引いたのが色絵菊鳥文大皿。色調は紫、緑、黄色。菊・鳥を画面全体に描いてある作品で、塗り埋めた黄色のコントラストに圧倒された。



色絵菊鳥文大皿 1655~1660年代

今回の寄贈展で公開された初期鍋島は六枚。うち色絵紗綾形文葉形皿と色絵花文瓜形小皿は裏面は無文であるが、献上品鍋島の生産は岩谷川内で始まっており、当時の特徴を有していることから草創期一六五〇年代頃の作品として紹介されている。

佐賀藩窯は寛文年間（一六六一〜一六七三）頃に有田から大川内山に移転しており、移転前の岩谷川内で創られた作品として興味深く鑑賞した。

また、色絵椿繫文小皿の背景は墨弾きによる白抜きの染付七宝繫文で埋められ、椿の花の上絵の赤が印象的な作品であった。

〜巖 由季子学芸員の図録から〜

一六一〇年代頃に肥前で磁器生産が開始されるまで、日本において磁器は高級な食器として主に中国から輸入されるものであった。日本市場向けに作られたとみられる祥瑞などの例はあるが、国産磁器の開発を契機に、日本国内の需要を反映した製品が生産可能になったといえる。国内向けに生産されたとみられる本コレクションの作品からは、そのデザインを通じて、当時の人々の好みを窺い知ることができよう。コレクション



ンの核である初期伊万里、初期色絵、初期鍋島は、いずれも「初期」を冠する。十七世紀前半に生産された日本の磁器のはじまりである初期伊万里、その後十七世紀中葉に開始された初期色絵、将軍家の食器として開発され、献上されはじめた時期の初期鍋島には、様式が定まらない草創期にのみ現れる自由で多彩の雰囲気を見ることが出来る。

十七世紀の肥前磁器は国内外の情勢の変化や新技術の導入に伴う急激な変遷がみられる。各様式の完成の前段階には、品質の高い製品の開発を目指しながらさまざまな技術が試みられ、技術が確立し洗練されていく中で選ばれなかった技術も初期の作例に見ることが出来る。赤戯幸コレクションは、そうした興味深い初期の製品の中でも質の高さと多彩で自由な雰囲気をあわせもつ製品を選び抜いて形成されている。

今回の赤戯幸コレクションの作品の殆どが、有田で磁器生産が始まった草創期のものであり、約四百年の時を超えている作品を見てあらためて感動した。地元にいることで、日頃から見慣れているとはいえ、寄贈展で貴重な作品に出会えたことに感謝したい。

旧有田町内のお寺の歴史

大串 和夫

お盆の季節を有田では迎えるが、七月盆は県内では他に嬉野市の一部だけであり、全国的には八月盆が一般的である。江戸期は、お盆は旧暦（太陰暦）で満月になる七月十五日ごろに全国で行われていたが、明治五年の新暦（太陽暦）採用以来、多くの地域では次第に旧暦の七月十五日に近い八月十五日頃にしたのである。有田では、明治三十九年の有田村役場日誌七月五日付、お盆を新暦に改める為、村会議員と区長との協議が行われた。（佐賀新聞 陶片物語の一部抜粋）

お盆といえば、お寺ですね。今回はお寺の歴史について、文献から紐解いてみたい。

幕府は慶長十七年（一六一二）キリスト教の禁止にもなつて、すべての人を寺院に所属させた。寺は宗派ごとに宗門法度によって規制、本山・末寺という支配体制ができ、毎年宗門改めが行われている。

江戸時代後半期の有田の寺院は佐賀本藩の寺社方に提出された由緒書によると左記の通りである。

・一向宗（浄土真宗）
無量山 西光寺 上幸平山

佐賀願正寺から提出された「由緒書」左記の通り
宝永六年（一七〇九）寺号これなく、古跡二十三か寺の内、杵島郡廻り村之、善嘉と申す古跡これあり候を有田皿山の慈海僧、墓地へ引き地の儀御免を蒙り、寺号を西光寺と仰せつけられ候

開基 慈海 第二世 泰林
第三世 恵燈

・臨濟宗
宝洞山 桂雲寺 本幸平山

武雄の広福護国禪寺の支配で、聖一国師（一二〇二〜一二八〇）の開堂で、開基は不明

・天童山 極楽寺 大樽山

開山、開基ともに不明で、寛政年間には桂雲寺が掛け持ちの無住の寺となっている。現存せず？

・曹洞宗
慈雲山 報恩寺 稗古場山

武雄の円応寺支配である。「当寺儀は何年に何某が建立と申す

儀、筆記御座なく候故、相知れ申さず」としながらも、開山は明暦四年（一六五八）六月入院「開山より七代何年ずつ住職仕り候也、筆記これなく候故相知れ申さず 八代現在桃岩、明和八年（一七七二）十一月入院仕り、当年迄十八年に相成り申し候」と報告している。報告したのは円応寺大祐で、日付け天明八年（一七八八）十二月である。

・日蓮宗（法華宗）
光瑞山 法元寺 赤絵町

小城の松尾山光勝寺の末寺である。由緒書によると、もともと杵島郡筒江（武雄市山内町）にあり、江瑞山と称したが光勝寺の第十九世 日億上人が有田に移転し、光瑞山と改称した。法元寺が有田に移ったのは、日億上人の遷化の年などから推定し



陶器祈願所となっている法元寺

て、寛永の初め頃ではないかと思われる。

松尾山光勝寺から寺社奉行所に提出した「末寺現在寺」によると

一、屋敷六畝十八歩 松浦郡赤絵町御物成地 法元寺

一、同十歩 岩谷川内山 同寺末庵

右同断 観音庵

右同 松浦郡 下南川原山

法元寺は元文元年（一七三六）佐賀藩から「山中繁盛・諸災転除」の勤行を命ぜられ、陶器祈願所となっている。

・浄土宗

医王山 瑠璃光寺善福院 外尾町

筑後 善導寺の末寺であるが四カ所の末庵を持っていた。

隠居庵 岩谷川内山

広福軒 稗古場山

阿弥陀堂 中島（上有田の字名）

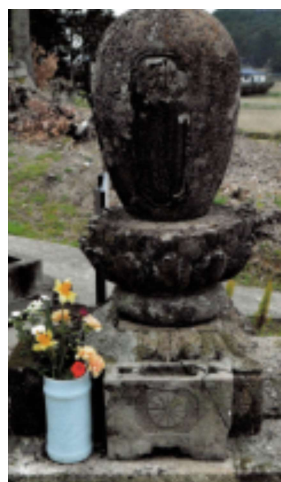
福泉庵 上南川原山

文政の大火後、外尾村（外尾町）に移転

・浄土真宗

紫雲山 浄真寺 戸矢

明治二十九年六月二十九日社寺公



龍造寺氏の家紋「十二日足」

認願の記載によれば、二三〇年程前、阿弥陀如来を本尊とする草庵を岡本幸之進が建立したとあり、明治初年以來、観音堂ありし、その側に紫雲庵を設立したとある。境内には享保十六年（一七三一）亥年九月六日と刻まれた卵形の無縫塔があり、伝傳法師と彫られ、水鉢の正面には、龍造寺氏の家紋「十二日足」が彫られている。龍造寺一派が建立したのか、歴史の解明が待たれる。

今回、町史にある古文書をそのまま記載したが、読者で解説していただきたい。

参考文献等

・有田町史 政治・社会編 1

・有田町史 陶業編 1

・明治二十九年六月二十九日

社寺公認願（有田歴史民俗資料館蔵）

令和五年八月十一日付

佐賀新聞陶片物語「珍しい七月盆」

歴史民俗資料館長 村上伸之

有田のトレードマーク（商標）

馬場 正明

二重の四角のワク内に草書で「福」を表示した「角福」マークは柿右衛門窯の商標です。この商標が初めて登録された頃の状況を、十二代柿右衛門の聞き書き「赤絵有情」から見えます。

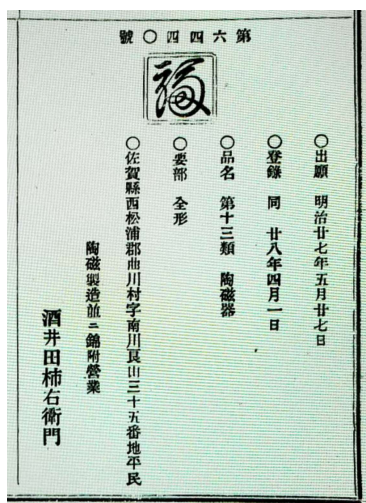
「角福」のマークは、もともと中国の陶磁器によく使ったもので、四角のワクの中に福の字を書いたマークで、ただおめでたい意味だったのでしょうか、日本でもこれをまねて焼きものに書くようになった。

四角のワクが一重だったり、二重だったり、福の字の書体が楷書だったり、草書であつたりでこれらを有

田近辺のあちこちの窯では焼きものの銘に使用し、柿右衛門窯でも七、八代の時分はたくさん使っていて、十一代の柿右衛門が明治十八年角福の銘を商標登録した。

商標制度の発足当時から商標登録のデータを蓄積する特許情報プラットフォームには、明治十八年の柿右衛門のデータは見られないが、登録番号に該当項目が無い所謂欠番が数ヶ所あるため柿右衛門の商標登録のデータも紛れ込んでるのではと思われる。因みにその十年後の明治二十八年に「角福」のマークが第六四四〇号①で更新登録されている。

柿右衛門の商標が登録になっても、よその窯では従来通り角福のマークを使う、そこで「角福」の商標は使ってはいけないといえ、逆に「角福」を柿右衛門が専有するのはおかしいと訴え、明治の末頃まで訴訟が続いたが、先願主義をとる商標法により角福の商標は柿右衛門窯の専有となった。



このような状況を見てか？おめでたい意味の「富」の字を四角のワクの中に表示した「角富」の銘が第六七九〇号②で瀬戸口勝太郎により商標登録されている。



それから百年過ぎた現代、有田町に住む人の商標は特許庁の特許情報プラットフォームで調べると、

(株) 柿右衛門窯

「柿右衛門」の商標第四八三二八八五号
「角福」の商標が第五二五一九九三三三
「乳白手」の商標が第五〇一二二二二二
酒井田柿右衛門

「濁手」の商標が第四九五八七八一八

今泉今右衛門

「今右衛門」の商標第四八三三五七五六号

(株) 源右衛門窯

「源右衛門」の商標第六五五九一二〇号

(株) 香蘭社の

「香蘭社」の商標は第五二八四二四五号

(株) ヤマトク

「有田山徳」の商標第六一四九三七八号

有田製窯(株)

「弥左衛門」の商標第四九八八八二二号

新装になった

アリタ ポーセレン ラボ(株)

それぞれの頭文字を並べた「a.r.t」の商標は第六六七一八〇八号③



有限会社しん窯

「しん窯」の商標第四六七九一八二二号

徳永陶磁器(株)

「幸楽窯」の商標は第六四四四七五四号
「SMART CERMIC」の商標第六二二九一六四号

有限会社久保田稔製陶所

「久右衛門」の商標第五七四〇二三六号

有限会社篠原溪山

「溪山」の商標は第六六二三五六四号④



高島豆腐店

「有田のごどうふ」の商標
第四四五八八〇〇号⑤



それぞれ登録されているが、随分おおくになったものだ。

あとがき

毎年二回の会報発行も恒例化してきたとはいえ、投稿される方々の中には負担になっている人もいと思う。私自身、今までは苦にならなかつた些細なことも年々歳を取り面倒になるこの頃だから、皆様のご苦勞も身近に感じてしまふ。

いつまで会報の編集作業を続けていけるのかと最近になり気になり始め、今のうちにこれまでの会報を一冊にして記念の本にしようと思ひ立つたが、始めて見ると結構な仕事量である。次回の会報発行までの半年間に下準備を済ませ備えたいと今月から早々に編集作業を開始している。

